

■■■ 「多文化共生」を考える研修会2017報告 ■■■

2今年度も4日間にわたり「多文化共生」を考える研修会2017を開催しました。

1日目は、コラムニストのサンドラ・ヘフェリン氏からご自身のハーフという立場から感じるステレオタイプが生み出す危うさについて、いろいろな例示をもとにお話いただき、作家の江宮隆之氏からは、韓国で韓国人に支えられながら韓国の貧しい子どもたちを世話するなどの貢献をした日本人など、架け橋になった人たちのお話を聞かせていただきました。

2日目は、(一社)グローバル人材サポート浜松代表理事の堀永乃氏、Wide International Support in Hamamatsu (WISH) 代表で、静岡文化芸術大学2年の成岡優輝氏より、大学生が中心となって、小学校現場で行われている就学前から小学校入学後まで実施されているサポートの状況をご報告いただきました。

2コマ目は、NPO法人おおさかこども多文化センター事務局長の橋本義範氏、大阪府立門真なみはや高等学校教諭の白石素子氏から大阪府における高校特別入学枠の制度と受入後の取り組みについて、「生きる力」をつけてほしいという強い思いとともに話しいただきました。

4日目は、神戸大学大学院准教授の齊藤善久氏より、ベトナム人実習生制度の問題について、送り出し側、受け入れ側の問題などを事例を通して話いただきました。首都大学東京法学系教授の谷口功一氏からは、「多文化共生」の難しさについて話がありました。

以下は、ニュース係からの、3日目の講演の報告です。

\*\*\*\*\*

研修テーマ【多様性を理解するために必要なこととは】の研修会が、8月25日に国際健康開発センター3階会議室1で開催され、下記の報告がされました。

1. 「共生と日本語教育」 講師：山野上 隆史 ((公財)とよなか国際交流協会事務局長)

現在の在留外国人数は約240万人で増加の傾向で、日本語学習者数はその1割弱の約20万人でほとんど増加していません。国の動きとしては、各省庁で諸施策が講じられてはいますが、2018年からの通常国会で議員立法での日本語教育振興基本法(仮称)の制定が検討されています。これまでは、地域のコミュニティーの中での日本語学習は地方自治体・地域での取り組みに依存していました。また、移民は受け入れないが技能実習生は受け入れるという実体と乖離した状況があります。言葉の壁に対する多様なアプローチとして、生活に直接つながる“生活日本語”、もう一つ上の仕事・進学を目指した“ステップアップ日本語”、基礎からきっちり学ぶ“日本語”、“居場所づくり・コミュニティーとの交流”、“アイデンティティの確信、家族・親族・友達とのつながり”などがありますが、日本語教室だからこそ果たせる「社会との接点」「窓口」としての役割を果たすことも重要です。国境を越えた移動がどんどん普通になっていくからこそお互いさまの感覚をスタンダードにしていきたいです。

2. 「多文化社会に向けた市民性教育～オーストラリアと日本の取り組みが示唆するもの～」

講師：見世 千賀子 (東京学芸大学国際教育センター准教授)

オーストラリアの人口は約2460万人(2017年)であるが、その26%が海外生まれです。それに先住民のアボリジニとトーレス海峡島嶼人が加わります。学校教育に関する権限は各州政府が持ち、各州で独自の学校教育制度や教育政策を展開してきました。1980年代半ば以降の教育改革で初めて、各州のカリキュラムフレームワークやスタンダードが作成されましたが、共通の検定教

科書は現在もありません。そこでは、テーマ学習、課題探求型の学習がよく行われています。1970年代に入って、白豪主義を放棄し、多文化主義へと国家の基本方針の大転換が図られ、多文化主義政策では、文化的多様性の尊重及び社会的公正という理念を柱に、相互理解や格差是正のための様々な施策が展開されています。

日本における多文化共生に向けた市民性教育の取り組み事例として、東京都立小山台高校定時制課程の「市民科（共に生きる）」の紹介がありました。学力・貧困・家庭状況・障害・いじめ・海外からの移住経験等の厳しい状況の中で、多文化共生に向けた市民性教育カリキュラムを開発・実施し、成果として、生徒が社会としっかり向き合う力（対話のスキル、他者に共感・尊重する資質・能力、社会への発進力等）を持つようになりました。

日本特有の思いやりの精神で多文化共生を考えるだけではなく、現実を少し批判的に見ようとする目や公正さという視点を持たせるような教育の方が、合理的ではないかと考えさせられました。（ニュース係 川淵 啓司）

---

## ■■■KFC日本語プロジェクト■■■

### ◆私の日本語の勉強

私はAnと申します。去年の7月、ベトナムの賑やかなホーチミン市から来ました。日本語の勉強を始めたのは2年前です。もし日本へ働きに来なかったら、日本語を勉強しようとは思いませんでした。26字あるアルファベットに比べると日本語仮名の文字数は非常に多いです。最初の時、私は毎日文字が書いてあるカードを見ながら音読して、夜に書くことを練習しました。毎日8時間をかけて、2週間ぐらいそうすると、大体、平仮名とカタカナの文字を覚えることができました。平仮名とカタカナの勉強が終わってから、基礎の文法（みんなの日本語I）を勉強しました。その後、漢字を勉強しました。漢字は本当にすごいと思います。20画数以上の字もありますし、覚えられないかなと思いました。漢字を勉強した時も、カードを使いました。漢字と漢字の意味、発音が書いてあるカードを何回も見てから、字、意味、発音を適当に1部を隠して、隠した部分を言ってみました。1日に25字ぐらい覚えられました。こういう勉強法は、新しい漢字を勉強する時、以前勉強した字を復習するのには必要です。その他、勉強した漢字で作られた言葉を書く練習もしました。私は漢字を書くのが好きです。何か書く時、漢字が分かる言葉はできるだけ漢字で書きます。漢字の部首になれた時、書くことも簡単になりました。毎日8時間日本語を勉強して、1年後、私は日本語能力試験（JLPT）N3に合格しました。来日当時、N3を持っているのに私はあまり話せませんでした。上司から仕事を貰う時、仕事の内容を打ち合わせすることができないので大変でした。会話力が向上するように、私はいろいろ調べてみました。話すことには、まず耳で勉強するのが大切です。聞いたらリピートします。その他、読解も役に立ちます。いい文書を通じて、言葉だけでなくその言葉の使い方や文法も勉強できます。ですから、私は今も聞き取り、シャドーイングと読解を練習しています。言語を勉強するには時間が大切です。その言語に接する時間はたくさんあればあるほど上手になります。最初の時、まだなれなくて、いろいろ困ることがあるかもしれませんが、毎日少しずつ頑張れば、いつか言語の勉強が楽になります。私は、今年7月に行われた日本語能力試験でN2に合格でき、大変嬉しかったです。（グエンバアン）

（Anさんは、毎週木曜日、シューズプラザでの夜クラスで日本語を学習しています。）

---

## ■■■ K F C 外国にルーツを持つ子どもの学習支援 ■■■

### ◆ 「Who am I? ～一番好きな自分を人前にだす・本当の自分であり続けるために～」

今回、K F Cの生徒に「自分ってどんな人なのか？」について語りました。テーマを「Who am I?」として私の経験談を元に、私と同じ立場に立つ子ども（両親のどちらか又は両方が外国人である少数派）とアイデンティティについて一緒に考えました。

K F Cの生徒に話したいと思うようになったのは、高校三年生の春から夏の下旬にかけて、子どもの学習のお手伝いをさせていただいていた頃、子どもが自分と同じ境遇（multi ethnic）に立っているとわかり、いつしか、昔の自分を思い出し、過去に感じたアイデンティティに関する辛い体験をみんなは経験したのか疑問を持ったからです。

パキスタン人の父と日本人の母の間に生まれた私は、何不自由ない生活を送っていましたが、通っていた公立の小学校では皆とは違う背景を持ち、学校の同級生や日本独自の教育方針とは波長が合わず、孤独を感じていました。そこで、同級生のことや学校環境を理解するために、幼い頃から形成された「本当の自分」を人前には出せずに新しい姿の自分を作りだしていました。

その後、日本の環境に仲間入りすることができた私は“演じている”状態にあった自分が本当のあるべき姿だと信じて、高校二年生になるまでそのような自分について疑うことはありませんでした。しかし、私のことを誰も知らないイギリス留学生活での海外の学生との刺激の多い三ヶ月間で、今までずっと自分と向き合ったことがないのだと気付かされたと同時に、ずっと他者や環境に合わせようとしている自分がいることに気づきました。それ以降、海外の大学への進学が決まるまで様々なことにチャレンジし、たくさん見つめ直すことができました。

1時間という短い時間の中で、自分の過去の経験、どのように乗り切ったのか、なぜ「本当の自分」を出すことが大切なのかの三つのことについて話した後に、生徒と質疑応答を行いました。私にとって「本当の自分」とは、どこにいようとそこにある文化や環境を自分なりに理解した上で、幼い頃から培った考え方やオリジナリティと融合することです。多文化な背景を持っていることから、他者には理解されない考え方を持っていることが多いと思っていた私は、いつも何かについて共感したり、誰かと共有したりできることを探していました。そして、他者が私といて楽しいように、偽の自分をいつしか作り出してしまっていました。今になって思うのは、自分のことを理解してくれる人はたくさんいるということです。他者に自分がどのような存在なのかを見せることは重要だし、軸のあるアイデンティティを持って日々新しいことにチャレンジし、自分と向き合わなければいけないと思っています。そうすることで、一番好きな自分の姿を人に自信を持って出すことができるのかなと確信しています。

そういったことから、K F Cの生徒に自分が一番なりたい姿になっていいんだよということを知って欲しかったのです。生徒に私がどのように思われているのかわからないですが、「一番好きな自分を人前にだす・本当の自分であり続ける」というメッセージを受け取って、実際にこれをきっかけに周りとは少し違った育ち方をした自分を前向きに受け止め、好きな自分を人に見せることについて恥ずかしくないでほしいと思っています。また、素直に自分を受け止められるきっかけになればなと願っています。そして、常にチャレンジし、前向きに前進して欲しいと思います。

また、K F Cという場所でアイデンティティについて悩む彼らにとっていつも寄り添ってくれる存在がいることを感じてもらったのかなと思います。（キャニー シャミール）

### ◆ 「Who am I?」を聞いて

7月26日にKFCで日本とパキスタンのダブルで高校を卒業したばかりのキャニー シャミール君がKFCで学習をしている中学生を対象に「Who am I?」というタイトルで話をしてくれました。

主な内容としては、キャニー君が学校生活で悩んだことや自身の経験に基づいての解決策そして中学生たちにこれからチャレンジしてほしいことを発表してくれました。キャニー君は幼稚園の頃にインターナショナルスクールに通っていて、ダブルの子が多かったので共感できることが多く、楽しい幼稚園生活を送っていました。しかし日本の小学校に上がるとみんなと話が合わない、趣味が違うという悩みが出てきました。その解決策として、みんなに話を合わせる努力をしたり、みんなとの距離感を縮めるためにサッカー部に入部したりと色々な方法を試みました。しかし模索する中で、幼い頃の自分なりの話し方や人へのオープンな接し方、相手のことを思う気持ちも消え、友達・先生・家族にひどい態度で接していたそうです。その原因としては、自分にとっての本当の理解者がいなかったことにあるということでした。

幼い頃に海外で暮らし、たくさんの文化を学び、他と全く違った家庭で育つも、小学校に上がると日本独自のルールに縛られ、本当の自分を出す場はなく、新しい自身の姿を作り、何をしていたかわからないまま生活していたそうです。中学生になってキャニー君に気持ちの変化が現れます。今までただの教える人であった先生と仲良くなり、またサッカー部をやめて水泳部に入るなど、新しいことにチャレンジして視野を広げることによって、「自分」という存在を確立していきます。キャニー君は「自分」を3つの円を使って図示してくれました。横に重なる円が3つあり、左の円が日本の文化を持った自分で、右の円がパキスタンの文化を持った自分、そしてどちらの円にも重なっている円が本当の自分です。つまり日本とパキスタンの両方の文化持っていたのが本当の自分ということです。KFCに来ている生徒の多くは自分のオリジナルなルーツを持っているので、これを機に「自分とはだれなのか」ということを考えてほしいのが今回の発表の狙いでした。

今回の発表でキャニー君に共感することが多々ありました。というのも私は小学校4年生で中国から日本に来て、今年で来日11年目になります。来日当初は言葉の問題で困ることが多かったのですが、2年経った頃には言葉の問題で困ることがなくなりました。私は公立の小学校に通っていたので、日本独自のルールに違和感を持ちながらも、これが日本での当たり前というふうに認識していました。だから無意識に学校では日本の文化を持った自分、家では中国の文化を持った自分を使い分けていました。

また私は自分が中国人であるというアイデンティティを強く持っていたため、小学校から高校まで周りの友達（日本人）と違いを感じつつも、違って当たり前と割り切っていました。しかし大学に入って、中国からの留学生と知り合うと、彼たちとの間にも壁があることを感じました。それは話の内容であったり、人付き合いの仕方であったり、すべて違っていました。そこで、はじめて自分が「日本人化した中国人」であることに気が付きました。この頃の私は「日本と中国の両方の文化を持つ自分」を日本の友達・中国の友達・家族に理解してほしい気持ちでいっぱいになり、みんなに自分のことについて語りましたが、思ったような反応が得られなくて、本当に自分のことを理解している人はいないとショックを受けました。これを機に「自分とは誰なのだろう」・「中国と日本のどちらに帰属するのか」と考えるようになりました。考えに考えた末に、どちらに帰属するわけでもなく、日本と中国の両方の文化を持つ自分であれば良いと思えるようになって、気持ちがすっとしました。キャニー君が発表で3つの円で自分を表現したときに、まさにこれだと思い、深く共感しました。

キャニー君が発表の最後で、生徒たちに向けて「悩んだときはKFCに相談に来て！」と言ったことを覚えています。みんな自分のことについて悩むのはそれぞれの時期がありますが、いざ悩んだときに、自分のルーツのこと・人間関係などどんな小さなことでもいいから、KFCがみんなにとって安心して相談できる場所でありたいし、私も含めKFCのスタッフ一同が自分の最大限の力でみんなをサポートできるように努力します！

(学習支援インターン・コーディネーター、兵庫県立大学 趙 倩)

---

## ■■■ ハナの会 ■■■

### ◆夏祭り

残暑お見舞い申し上げます。まだまだ暑い日が続いています。みなさんこの暑さに参る頃 デイサービスでは夏祭りをしています。7月11日(火)、12日(水)、13日(木)に行いました。まずは、食事を担当者2人がそれぞれのアイデアを凝らして、頑張ってくれました。バイキング式だったので、みなさんが大好きな肉料理はあっという間になくなります。サラダやフルーツ盛りまであるので、みなさん笑顔です。

午後からのイベントは、火曜日が楽器二胡の演奏、水曜日は歌のお姉さんの山下まゆみさん、木曜日は銭太鼓です。二胡はなんともいえない寂しげな音が癒しを感じます。歌の山下さんは何度かきて下さっていますから、安心です。しっかりした歌声で張りのある声、自然に身体が動く、星影のワルツの替え歌、誘惑の春を教えてもらって、みなさんと合唱しました。楽しい歌です。銭太鼓も何度か来て下さっています。銭の入ったバチを振ることにより音がなります。上げたり下げたり投げたりと色々技をいれて曲に合わせバチをふるベトナムの人たちも喜んでくれました。

このあとに全員参加による洗濯物干しゲーム、男女でチームに分かれてホワイトボードに張ってある名前のTシャツ、ズボンかスカートを手前に紐を張ってあるから、そこに洗濯バサミにとめる簡単な動作ですが、1人でこけないように補助をしてゲームを行いました。景品があると聞いてみんな張り切っていました。

最後に恒例のスイカ割りゲームです。人間の入ったスイカの横に、本物スイカを並べて叩く、簡単なゲームです。1人1人目隠しをして誘導して、まず人間の入ったスイカを叩く、そして本物のスイカの張りぼてには、理事長と男性スタッフ2名が入りました。特にスタッフの一人の山下のびびっている様子が面白かったです。また、歌の山下さんも面白いので、ぜひ本物スイカになりたいと体験されました。最後に、スイカをおやつに頂きました。楽しい時間はあっという間すぎ、夏祭りも無事に終わりました。少しでも暑さを忘れて元気出してもらえたらとスタッフ一同色々考えております。まだ暑さ残っていますが皆さんのお身体御自愛くださいませ。(竹宮 章子)

---

## ■■■ KFC中国帰国者支援事業 ■■■

### ◆明舞団地における9月10帰国者地域交流会

戦後70年が過ぎ、中国残留邦人帰国者一世の殆どが70代～90代になり、二世も60代、70代を迎え、高齢化と介護の問題が顕著になってきています。

全国的な動きとしても(公財)中国残留孤児援護基金が平成20年から行っていた「語りかけ事業」が、今年度から全国7つの中国帰国者支援センターで介護支援事業として実施される予定です

す。生活習慣の違いや日本語が十分にできない等の理由により、周囲とコミュニケーションがうまく取れず孤立する方がいます。介護事業所には中国語のできる職員もいますが、数は少なく日本語が十分できない帰国者に対応できているとは言えません。介護事業所で孤独感を感じている帰国者が少しでも安心して介護サービスが利用できるように語りかけボランティアを派遣し、精神面や身体面の状態が向上するようにしていくとのことです。

2010年の聞き取り調査から始まったKFC新長田帰国者交流会ですが、高齢化につれ、バスや電車で1時間近くかけて参加されることは段々難しくなっています。またKFCの介護事業所でも片道1時間かけて通うのは疲れるとの声が上がっています。

一方、神戸市や明石市の支援相談員の方から、日本人ばかりの介護サービスや老人会等に馴染めず、行き先もなく引きこもりになっている、介護より一歩手前の行き先がなく困っているという例も伺います。

このような状況を踏まえ、集住している明舞団地の近くに交流会ができるか模索、検討した結果、地域で長年活動しているNPOひまわり会の協力を得て、9月10日に明舞団地で地域の方々を巻き込んだ交流会を実施することになりました。プログラムとしては帰国者の方が中国の楽器（二胡、フルス）、日本の方が（フルート、マジック）を披露し、みんなでふるさと等歌を一緒に歌うなどを予定しています。初めての試みで不安も沢山ありますが、住んでいる地域で支援活動できるように頑張りたいと思います。（フフデルゲル）

---

## ■■■ グループホーム・小規模多機能型居宅介護ハナ ■■■

### ◆アットホームな夏祭り

グループホームハナは、7月1日に無事5周年を迎えることができ、6年目に入りました。7月15日の5周年祭に参加し、協力していただいた皆様に、厚く御礼を申し上げます。

一つの節目を向かえ、これからも変わることなく、一步一步前を向いて歩んでまいります。今後、ご指導、ご鞭撻のほど、よろしくお願い申し上げます。

さて、去る8月25日(金)にハナで、夏祭りを行いました。もうすぐ9月だというのに、暑い日で、そんな中、炭火で焼き鳥やフランクフルトを焼き、焼きそば、綿菓子など、祭りの出店でよく見かける食べ物を手作りを用意しました。焼き鳥を焼いていた職員は、暑い日ざしの中、汗だくになりながら焼いていました。大変だったと思います。焼きたては、程よく塩が効いていて、普段、あまり召し上がらない利用者も「美味しい」とたくさん食べておられました。綿菓子は、職員が自宅にあった機械を持ち込んで、利用者の目の前で作ってくれたので、出来上がる過程に、皆さん、興味津々。目の前で作ってもらって、それを受け取ると、子どものように、目が輝いていました。その他、射的やスーパーボールすくい等、職員が連れてきた子どもと一緒に楽しみながら参加され、見ているだけの利用者も皆さんにここにこしておられました。アットホームで素敵な時間だったと思います。

さて、9月に入ります。敬老月間です。1本のうれしい電話がありました。5月はこどもの日がありますが、その関連で利用者と一緒に訪問した近隣の保育園から、5月のときの御礼に、今度は、園の方からハナに訪問したいとおっしゃってくださったのです。『こぐまの森』という徒歩5分ぐらいのところにある保育園です。こうして、少しずつでも、地域のなかで、交流が増えていけばいいなと思いました。グループホームハナと小規模多機能型居宅介護ハナは、地域密着型施設ですが、地域に溶け込んでいる実感はまだあまり感じられません。それは、逆に言えば、可能性がたくさんあることだと思いますし、近隣に住む職員も多いため、その職員から情報を聞いたり、

協力を得ながら、少しずつでも、地域の中のハナを目指していきたいと思います。でも大切にしたいのは、夏祭りで感じたアットホームさ。ハナの良さだと思っています。その懐の深さは失わずに、周囲との交流が広がっていっていけば、と思っています。これからもよろしくお願いします。（森 佳緒里）

---

### ■■■ 今後の予定 ■■■

#### ■日本語ボランティアのための基礎講座（全9回）

10月8日（日）～12月3日（日）

於 新長田勤労市民センター

#### ■KFC帰国者新長田交流会

9月10日（日） 帰国者地域交流会

9月26日（火） 敬老会

#### ■トヨタ財団助成事業

9月17日（日） シンポジウム

「共生の方法論～移民当事者のエンパワーメント～」於 慶應義塾大学日吉キャンパス